

戦姫絶唱シンフォギア
—Knight of rebellion—

ゆきしろ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

— 聖遺物 —

それは世界各地の神話や伝承に登場する、超常の性能を秘めた武具を指す言葉。とある事件によりその身に聖遺物を宿すことになった少女、立花響。

人智を超えた力を自らの信じる正義のために奮っていた。

そしてもう一人、同じく聖遺物をその身に宿す少年がいた。

彼は自らをこう呼ぶ

叛逆の騎士—モードレッド— と

目次

	o n	K n i g h t	o f	r e b e l l i
		I F s t o r y		
		騎士		翳り裂く閃光と叛逆の
l s t		新しい私に祝福を		
				6

1 K n i g h t o f r e b e l l i o n

その出会いは突然だった

立花響と風鳴翼の前に1度失われた聖遺物——ネフシユタンの鎧——を纏った謎の少女が現れた戦い。

少女相手に苦戦を強いられる翼、ノイズに阻まれ身動きが取れずにいる響。

追い込まれ窮地に立たされていたその時だった。

「おい女、ちよつと屈んでろ」

その場に聞き覚えのない声が響く。突然の声に響はそちらへ向こうとするがそれは叶わなかった。

赤黒い一つの斬撃がノイズを切り裂きながら彼女に迫っていたからだ。

「うわあ!?!」

間一髪倒れ込むように避ける、周りを見ればあれだけいたノイズも先程の斬撃にほとんどやられてしまっていた。

「今のは……」

改めて声のした方へ顔を向けるとそこには一人の男が立っていた。

その男は姿は異様であった

先程の斬撃を飛ばしたであろう眩い輝きを放つ白銀の剣を携え、棘のようなものが鎧の如くその身体を覆っていた。

「随分と派手にやってるから来てみれば面白いことになってるじゃねエか」

獰猛な笑みを浮かべる男に響は謂れもない恐怖を感じた。

戦いを繰り広げていた少女と翼も、先程の攻撃から彼の存在に気付いていた。

二人とも得体の知れない男に対して戦いの手を止め警戒していた。

鎧のような身体、その手に輝く剣、そして先程のノイズを壊滅させた斬撃、普通の間でないことは確かだった。

「てめえ何もんだ！・・・こいつと同じように邪魔するってんなら容赦しねえぞ!!」

少女が威嚇するように叫ぶ。それを受けても彼は笑みを崩さずゆっくりと歩みながら語り出す。

「そうカツカすんなよ、せっかくの美人が台無しだぜ？」

「俺は別に誰の味方でもねエさ・・・ただお前らが派手に暴れてるからよオ・・・面白そうだから俺も混ぜてもらおうかと思つてな」

「まああのザゴどもは鬱陶しいから適当に掃除しただけだ、それにその方が・・・」

「メインディッシュをたっぷり堪能できるからなア？」

その瞬間、鋭い殺気が二人を捉えた。

この男は危険だ、そう直感できるほどの殺気が彼から溢れ出していた。

「あなたにも、大人しくしてもらおう必要がありそうね……後で詳しく話を聞かせてもらおうか」

「てめえが何者かは知らねえがこんなんじゃないや目的が果たせねえからな、悪いが叩きのめしてやるよ！」

標的を変え彼へと構える二人、その様子を見ても余裕な態度を崩さずより笑みを深める男。

「いいねエー！やる気満々でこっちも来た甲斐があるつてもんだ！」

「加減できないでヤツちまうかもしれないねエから名乗っておいてやるよ!!」

そして彼は剣を天に掲げこう叫ぶ。

「俺は宝剣クラレントに導かれし叛逆の騎士……モードレッド様だア!!」
叫びに呼応するように白銀の剣は赤黒い光を纏う。

これが自らをモードレッドと名乗る男——沢城鎧利——との出会いであった。

これは、奏者と騎士の長きにわたる因縁の物語

—あなたは何故力をそんな風にしか使えないんですか!?

—この力は俺のものだ!! 誰のものでもねエ、俺の為にあるんだよオ!!!—

—人を守る剣としてお前を見逃すわけにはいかん!!—

—堅苦しいヤツは嫌いだなア! お前も欲望のままに生きてみるよ? 楽しくてしようがないぜこいつは!!—

—私はお前とは違う! 守るべきものも帰る場所もあるんだ!!—

—今のお前の顔は恐れている顔だ・・何かを無くすことに怯えてやがる! 気に食わねエな!! 前の方が俺好みの女だったぜ!!—

—あなたのその歪んだ心、私が正してみせる!—

—散々暴れておいて今更正義の味方ズラかア!? てめエはあのクソ女思い出してイライラするんだよオ!!—

—罪は償える・・みんなが教えてくれたこと、今度は私が教える番デス!!—

—罪だア? 俺はそんなもん背負っちゃいねエよ! 俺がしてるのは当たり前のことだろうがア!!!—

—本当の幸せは・・・人が笑って暮らせる生き方はそんな歪んだものじゃない!!—

—何も知らねエガキがほざくな! ぬるま湯に浸かった人生なんざ今更いらねエんだよ!!—

叛逆は止まらない

その命が尽きるまで

—さア！てめエが正義を信じるってんなら俺を殺してみやがれ！！立花響イ！！—
—殺さない！必ず止めてみせる！！それが私の戦いだから！！—

槍よ、騎士を救ってみせろ　それがお前の証明だ

I F s t o r y 翳り裂く閃光と叛逆の騎士

1 s t 新しい私に祝福を

何故自分がこんな目に合わなければならぬのか

立花響は薄れていく意識の中そんなことを考えていた。

ツヴァイウイングのライブで起きた事件に巻き込まれた彼女、一命をとりとめ病院でリハビリに励みまた元の生活に戻れるはずだった。

だが現実には残酷だった。事件で生き残った者たちへのバッシングは彼女も例外ではなかった。

謂れもない誹謗中傷、彼女自身だけでなく家族をも巻き込むように実害は広がっていき

く。耐えられなかった、自分だけでなく関係のない大切な家族まで傷つくのは。

だから離れた。あてもなくただがむしやらに走った。ここではない何処かへ、遠く離れた場所へ逃げたかった。

どれだけ進めばいいのか。でも自分がいなければ家族は守れる。その思いだけでとにかく進んでいった。

人の視線に怯えながら隠れるように彷徨う。なけなしの資金も底がつき何日食事をしていないかも分からない。そんな状態であった彼女が力尽きるのは時間の問題だった。

薄暗い路地でついに倒れる響、頭の中は憎しみで支配されていた。

誰のせいだ、自分のせい？ノイズのせい？それとも自分を傷つけた人間達？

どれもこれも許せなかった。ただ普通の日常を過ごしていたかっただけ、ただそれだけなのに。

—許せない、全部・・・全部許せない—

—ノイズも、私の大切なものを傷つけた人間たちも・・・全部許せない!!—

—胸の傷が疼く・・・この感覚は何?—

湧き出す感情、そして不意に疼く胸の傷が彼女の意識を辛うじて繋ぎ止めていた。

—こんなところで終わりたいくない・・・私は失ったまま終わりたいくない!!—

「おい女、まだ生きてるか?」

響が顔を上げると、そこには一人の男が立っていた。

その男が響の人生を狂わせるとはこの時の彼女は知る由もなかった。

沢城鎧利がその道を通つたのは気まぐれではなく何かを感じ取つたからだつた。

不思議な力に目覚めてから彼はあらゆることにその力を使つていた。

ノイズを倒すこと、裏の世界で仕事をこなすこと、気に入らないものを潰すこと、今までとは違う刺激的な毎日に彼は有頂天だつた。

「全く、今日も歯ごたえのない仕事だつたぜ」

金払いは良かったけどな、と一人ごちる。今日もとある人物からの依頼を終え今の拠点へと戻ろうとしていた。

裏の世界に関わるようになってからというもの、彼の力を狙うものも存在していた。退けてはいるもののその頻度に彼は一つの場所に留まらず転々としていた。

それに最近は何のノイズ狩りの際にとある存在に出くわすことにも困つていた。

「あの女……次出会つた時はどうしてやろうか」

彼が遭遇した存在、それはシンフォギアと呼ばれる装備をまとつた少女―風鳴翼―である。彼自身彼女のような存在がいることは人伝に聞いてはいたが、実際に自分が遭遇してしまふとは思つてもいかなかった。

力をノイズを倒すこと以外にも利用している彼の存在は向こうにも認知されており、出会う度身柄を拘束しようとする彼女に彼は非常にうんざりしていた。

素顔こそばれていないが、いつ自分の足取りが掴まれるか分かったものではない。誰かに縛られることは大嫌いだったが自分の身の為にも我慢せざるを得なかった。

そんな事を考えながら夜の街を彷徨っていると、それは唐突に訪れた。

彼は自分の心臓、いやそこに溶け込んでいるものが脈打つのを感じた。

—なんだこの感覚？あの女と出会った時に似てやがる・・・—

以前翼と出会い戦闘になった時、彼は普段とは違う感覚を受けていた。自分の心臓と融合した聖遺物—クラレント—から鼓動を感じていた。

それが何故なのか、彼自身は分からなかったがその感覚のおかげで彼女が近くに居るのかどうか、その判断を行うことができた。

だが、その時に感じていたものとは似ているが少し違う。そしてとても弱々しい感覚。それが狭く薄暗い路地から感じれていた。

—あの女がこんなところにいるとは思えねエ・・・一応確かめておくか—

もしかしたら彼女と同じように力を持った者がいるのかもしれない。その正体を確かめるため普段は通らない道を進んでいく。

心做しか彼の表情はこの状況を楽しんでいるようだった。

奥に進むとそこには一人の少女が倒れていた。

その少女こそ、今しがた力尽き倒れてしまった立花響であった。

服は薄汚れ、身体の至る所に傷もありひと目でまともな状態ではないと分かる有様だった。

何故彼女がこんな所で倒れているのか鎧利にとつてそんなことは知る由もないが、ただ先程感じたものの正体が彼女であるということだけは確かだった。

「おい女、まだ生きてるか？」

少女に声を掛ける。辛うじて顔を上げこちらを見つめる少女。

——こいつはひでエ顔だ……だが俺好みだぜ——

その表情は突如現れた自分への怯えだけではなかった。怒り、憎しみ、負の感情が手に取るように感じられた。

自分と同じように誰かを憎んでいる。その感情が彼女を奮い立たせ意識を紡いでいるのだと彼は見抜いた。

「これは面白いことになりそうだ……」

放っておくのも構わないが彼女の力の正体、そして何故この状況まで追い込まれたのかを知る為にも連れて行ってしまおうと考えた。

有無を言わず彼女を抱え来た道を戻る。響ももはや抵抗する力など無くされるがままであった。

響が目を覚ましたのは知らない天井の部屋だった。

—なんで私こんなところで寝てるの？—

確か自分は路地で倒れていたはずなのに、朧げな記憶を辿って確かめていく。意識が途絶える前、声をかけられたのを思い出す。

—助けられたのかな？・・・でもなんで？—

今の自分を助ける人間なんているのだろうか？深く傷つけられた彼女の心が猜疑心を強くしていた。

取り留めのない思考を繰り返していると部屋の扉が開けられた。

「よオ目覚めたか？」

部屋に入った男は自分を一瞥するとぶつきらぼうにそう声をかけた。

男はビニール袋を手を下げていた。買い物にでも行っていたのだろうか？

ソファに座ると袋の中身をこちらに投げつけてきた。

突然のことに物を取りこぼしそうになるが辛うじて受け取るとそれはコンビニで

売ってるようなおにぎりだった。

「とりあえず適当に買ってきたが食えねエもんじゃねエだろ?」

「お前には色々聞きてエことがあるが、ただどその前に飯だ飯」

聞きたいことがある、男はそう答えたが疑問が尽きなかった。

自分に聞くこと? 知りもしない男にそう言われより警戒心が強まった。

「なんで助けたの?」

「あア?」

「なんで私を助けたの?」
「お金だつて持つてないし、あなたに返すものなんて何もない」

「私に聞きたいことつて何? 話すことなんて何も無いよ」

一度言葉を口にするのと止まらなかつた。聞きたかつたことを一気に吐き出す。

自分の言葉に男は少し思案すると、まずこう返した。

「鎧利だ」

「・・・え?」

「沢城鎧利、俺の名前だ」

「いいか? さつきも言つたとおり俺はお前に聞きたいことがあつたから連れてきた、ただそれだけだ」

「別にお前を助けたわけじゃねエ・俺がそうしたいからそうただけだ」

いきなり名を名乗られるとは思っておらずつい惚けたような声がでてしまった。

俺がそうしたいからそうただけだ。彼の言ったことは善良な人間の言うような内容ではないが、嘘をついているようには感じられなかった。

「お前の名前は？」

「・・・へ？」

「へじゃねエ、こつちの名前教えたんだ・・・お前のほうも名前ぐらい教えろ」

「・・・響、立花響」

「響か・・・じゃあ響、飯を食え。飯を食ったらお前の聞きたいことにも全部答えてやる：お前も俺の聞きたいことに全部答える？いいな」

名前を聞きそう言うのと彼はこちらも見もせず自分の食事を行っていた。

——よく分からないけど・・・変な人——

粗野で乱暴な態度と言葉遣い、でも何故だか彼のことを悪く思えなかった。

言われた通り自分も食事を進める。

久しぶりに人とまともな会話をしたおかげか、少し表情がほころんでいたのは彼女自身も気付かなかった。

「じゃあまず一つ目だが、お前なんであんなところで倒れてやがった?」

食事を終えしばらくすると彼は本題を切り出してきた。

彼女としてはあまり思い出したくないことだが、助けてもらった手前素直に話すことにした。

「この前あつたツヴァイウイングのライブのこと、知ってる?」

「ツヴァイウイング? 悪いがよく知らねえな」

「あんなに人気なのに知らないの? 今だつて街中とかでもよく曲流れてると思うんだけど・・・」

「聞いたことあるかもしれないねエが歌なんざ興味ないんでな、どうでもいい・・・」

「んでそのライブでなんかあつてお前にそれが関係してると感じか? その口ぶりだと」

「・・・うん、私は友達と一緒にそのライブに行くはずだった・・・」

それから今まで起きたことを一つ一つ話した。

そのライブにノイズが現れたこと、ツヴァイウイングの二人がノイズと戦っていたこと、その1人に助けられ自分が生き残ったこと、その後受けた迫害のこと、家族を守る為に1人抜け出したこと。

どれもこれも響にとつて最悪の思い出だった。そんな話を彼は黙って聞き続けた。

「それで、歩けなくなつてあそこで倒れてたの……大体こんな感じだけどこんなこと聞きたかつたの？」

「なるほどなア……いや十分すぎるぜ響、なアお前はツヴァイウィングつて奴らが戦つてたつて言つたな？どんな姿か覚えてるか？」

「臆気にしか覚えてないけど……一人は、私を助けてくれた天羽奏つて人は槍みたいなので戦つてて……もう一人の風鳴翼つて人は刀みたいなので戦つてた」

「刀だ?!?おい!そいつは青髪の女で間違いないか!!?」

「そ、そうだけど……あなた二人の見た目とかも全く知らないの?」

響の話を聞いた後、鎧利は満足そうにしてひとつの単語に反応した。

彼のその反応に少し驚いた響だったが、二人のことを本当に知らない様子にも驚いていた。

「あアさつきも言つたが興味無いことはどうでもいいんでな……しかしそういうことか、納得がいったぜ」

「後一つ質問だ……お前の胸の傷、その時受けたもので間違いないか?」

「胸の傷つて……まさか見たの!」

「その服着替えさせた人間が俺以外にいると思うか？その時に見えたからな、別に変なことしちやいねエよ」

確かに、今まで意識してなかったせいで気付かなかったが今彼女が着ている服は逃げてる最中のボロボロの服ではなく自分のよりサイズの大きいパーカーであった。

新しく服を変えてもらったことに感謝するが、それでも裸を見られたことに赤面してしまう。

「それとも襲っておいたほうが良かったか？ガキだが結構発育良さそうだしヤツちまっでいいんならシてやるぜ？」

「バカ言わないで！・・セクハラだよそういうの」

「そう怒るなよ、少しからかっただけだ」

「・・・胸の傷だけどその時にできたやつだよ。天羽奏が・・奏さんが私を庇った時に彼女の持ってた槍が欠けて、その破片が刺さったの」

「私が覚えてることが間違いないければそういうことになる・・・でもこの傷が何かあるの？」

彼に呆れたような視線を向けながらも傷のことにも答えを返す。

納得のいったような顔をして思案する鎧利、しばらくするとまた口を開いた。

「その傷はただの傷じゃねエよ・・お前に特別なものが宿ってる証拠だ」

「出るぞ、お前に見せるもんがある」

特別なもの、思い当たる節がない彼女だったが部屋から出ようとすると彼を慌てて追いかける。

「待つて！まだ私も聞きたいことが！」

「安心しろ、しつかり答えてやるから……歩きながらでもな」

追いかける響を一瞥し、声を掛けてから進む鎧利。

日が沈みかけた外へと二人は向かうのであった。

「ねえあなたって何者？この傷のことも、二人が使つてた力のことも何か知つてるようだけど……」

「何者か……なんて答えるべきだろうな」

「お前、聖遺物つて言われて分かるか？」

「何それ？」

「俺も詳しくは知らねエが、よく神話とか御伽噺とかに出てくる武器とかあんだろ？ああいうもの……を言うんだとよ」

「それつてのがまだこの世の中には残つてゐるらしくてな、それには不思議な力が宿つて

るのや」

「不思議な力って・・・どんな力？」

「例えば・・・ノイズを倒したりできる力とかな」

歩きながら彼に質問を投げ掛ける。

まず彼が何者なのか知りたかった。自分に起きたことに対して何か知っているようであつたし普通の人間のようにには思えなかつた。

そんな彼からまた一つ聞き慣れない単語が出てきた。

聖遺物、どうやらそれが自分たちに関係するものらしい。

「さアこんなところでいいだろ、人目に付くわけにはいかねエからな」

「お前もパーカー外していいぞ・・・どうせこんな所に人なんかこねエからよ」

どうやら目的地に着いたようだ。

街外れにある廃工場、確かに人が近寄るような場所ではない。

ここで彼が何をするのか、響には見当もつかなかつた。

「さっきの俺が何者かつて話だが・・・こいつがその答えになる」

彼が手を翳すとそこには一振りの剣が現れた。

暗い夜の中、うつすらと光を放つ白銀の剣。

「何・・・それ？」

「こいつが聖遺物つてやつき、クラレント……これの名だ」

「俺は昔事故で死にかけたことがあってなア……その時俺の心臓にはあるモノが入り込んじまった……」

「それが……クラレント？」

「正確にはその欠片だが……そいつが俺の体に入ってからにはこんなことができるようになった」

驚く響に語りかける鎧利、その手に輝く剣は彼が普通の人間ではないことを物語っていた。

だがそれだけではなく彼の体には新たに変化が現れていた。

鉄が軋むような音を立てながら彼の体を鋭い棘が鎧のように覆っていく。

その姿は勇猛な騎士のようでもあり、怒り狂う悪魔のようでもあった。

「な、何なのその姿……それが力だっていうの!？」

「ああそうだ！俺はもうただの人間なんかじゃねエ……誰よりも強い力を！誰にも邪魔されねエのさ!!」

「俺は選ばれたんだ……クラレントに、力を扱うに値する人間だつてな」

彼に出会ってから初めて恐怖を感じた。

荒っぽい言動、だけどどこか憎めない。そんな風を感じた彼は何処にもいなかった。

目の前には怒り、憎しみ、強い負の感情を纏った一人の男。

路地で一人倒れていた、あの時の自分のように

「なア響、俺たちは同類だ・・・」

「い、嫌・・・」

「お前のその傷は俺と同じ聖遺物が体に混じった証拠だ・・・お前は気付いてないがその体はもう普通の人間じゃない」

「来ないで・・・来ないで・・・」

「お前は選ばれたのさ・・・感じるだろうか？傷が疼くだろうか？」

歩み寄る彼から遠ざかろうとする響。だが恐怖からかうまく体を動かせなかった。

逃げ出さなければ、言葉に耳を貸してはいけない、そう本能が訴えかけるのに彼から目を離せなかった。

心を掴まれたようだった。そして、それに呼応するかのように胸の傷が疼き始めた。

「もう我慢する必要なんてないんだ・・・憎いだろ？恨めしいだろ？自分の全てを奪った奴らが!!」

「その感情に従え!!その力に従え!!そして復讐してやるんだ!!」

「この理不尽な世界に!!!」

その慟哭を聞いた時。恐怖心は薄れ湧き上がってくるのは安心感だった。

—この人は私と同じ．．．それはきつと本当—

—力のことじゃない．．．たくさん傷ついて、たくさん裏切られて．．．—

—私のこの感情は間違つてないって．．．きつと教えてくれるんだ．．．—

「私は．．．私は許せない!」

「ノイズも、私の大切なものを傷つけた人間たちも．．．全部許せない!!」

「ああ歌が聴こえる!．．．そうかこれが私の．．．!!」

未練を振り切り、胸に込み上げる歌を刻む。

その瞬間、世界は光に包まれた。

光が収まると、そこには変貌した彼女がいた。

体のラインが分かるようなスーツを身に纏い、腰や足には鎧のようなパーツがつけられている。

しかし、一番目を引くのはそこでなく人のものとはかけ離れた巨大化した腕だった。

その重さからか少し前のめりになっていた。

「よオ．．．気分はどうだ?」

「最高だよ．．．!!これが私の力．．．ガングニール!!」

鎧利の問いかけに答える響。

その顔には、以前の彼女が浮かべていた暖かい笑顔はなかった。

長いマフラーの奥で、獲物を狙うような獰猛な笑顔を浮かべる響。

そこにはもう、人助けが趣味な優しい女の子はいなかった。

いるのは復讐に囚われた一振りの撃槍

「じゃあ始めるとするか・・派手に暴れてやろうぜ!!」

「全部全部壊してやる! 私の邪魔をする奴らは全部!!」

何処か遠くで懐かしい少女の声が聞こえたような気がした

でも彼女にもうそんなものは必要なかった

今の彼女の全てはその身に宿った力と

自分を理解してくれる騎士なのだから